



アーティスト・イン・レジデンス「home away home -journey beyond the time-」  
招聘アーティスト、ジュピター・プラダンのパフォーマンス後（大阪新美術館予定地にて）

## 目次

文学研究科長 あいさつ .....	P 2	第7回大阪大学文学部・文学研究科 同窓会講座についてのご報告 .....	P 7
同窓会会長 あいさつ .....	P 2	事務局便り .....	P 7
【特集】声なき声の芸術祭 ..	P 2～3	同窓会寄付者のご報告と 会長の謝辞 .....	P 8
同窓生からのメッセージ .....	P 4	第8回大阪大学文学部・文学研究科 同窓会講座のご案内 .....	P 8
「教育ゆめ基金」のご報告と 研究助成を受けた学生の声 .....	P 5		
退職される先生方からの メッセージ .....	P 6～7		



アーティスト・イン・レジデンス  
「home away home -journey beyond the time-」  
招聘アーティスト、ジュピター・プラダン作成の「ジン・リキ・シャ」  
と竹製のプランコ（大阪新美術館予定地にて）

## アプリで触れる、文学部・文学研究科の教育・研究

文学研究科長 金水 敏

同窓生のみならずの中にも、スマートフォンやタブレット端末を愛用していらっしゃる方が多いと思いますが、そんな方々に、二つのアプリをご紹介しますと思います（二つともアップルとアンドロイドで無料ダウンロード可）。

一つは「くずし字学習支援アプリKuLlA」で、江戸時代以前の版本・写本や古文書に出てくる仮名・漢字のくずし字（草体）を学ぶ手助けをしてくれるアプリです。とても使いやすく、練習問題も出来るようになっていて、遊び感覚でくずし字を読む力が付けられます。このアプリを開発したのは、文学研究科の飯倉洋一教授の研究グループで、平成二十九年一月段階で五万ダウンロードを超えています。

もう一つは、「Ohayashi Sensei（お囃子先生）」で、能楽のお囃子に用いられる四つの楽器（笛、小鼓、大鼓、太鼓）を画面上で操作して演奏することができるものです。しかも「太鼓の達人」のようなミニゲームも楽しめて、能楽にあまり馴染みのない方でも親しみを感じさせる工夫がされています。こちらは、なんと大阪大学大学院を卒業した二人のチェコ人（ポポフ・ヤンコとストラボフ・ペトコ）が山本能楽堂と共同で開発したものです。

この二つのアプリは、文学部の研究や学びが、ITの助けを得て世界中の方々の生活を豊かにしていく力を持っていることを如実に示してくれました。これに見習い、私たちは今後、さまざまな方法で大阪大学文学部の研究・教育を身近に知っていただく工夫を重ねていきたいと思っております。



**略歴**  
1956年生まれ。東京大学大学院人文・社会科学系研究科修士課程修了。博士（文学）取得。専門は国語学。1997年文学部に着任。主要な著書として『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（岩波書店、2003年）、『日本語存在表現の歴史』（ひつじ書房、2006年）、『コレモ日本語アルカ？ 異人のことばが生まれると』（岩波書店、2014年）、『（役割語）小辞典』（研究社、2014年）他。

## 同窓同期会

### 「待兼六〇談話会」のこと

同窓会会長 志水 紀代子

二〇一五年に前任者の河上会長からバトンを引き継いで、この四月で丸二年になります。託された前任者の熱い思いをどのように受け継いでいけばよいのか、試行錯誤の二年間でしたが、村田事務局長のもと若い現役の先生方が事務局スタッフを努めてくださり、同窓会講座も充実、教育ゆめ基金にも関心をもって下さる方々がふえ、うれしく、頑張らなければ、と思っております。

今年二〇一七年は一九四八年の文学部創設から七〇年目にあたりますが、二〇一二年に発行された同窓会名簿の改訂版を発刊する年でもあります。昨今インターネットの普及で、必要な情報は電子媒体で済ませることが多くなりましたが、紙媒体の「同窓会名簿」がもつ絆の力が、おおいことは、会員の皆様が何より実感していただけることでしょう。そしてこのニューズレターが、卒業生のみならずと大学を繋ぐ双方方向のもう一つの大切な絆であることは言うまでもありません。卒業されたみなさんが、その後同期会でどのような交流を持ってもらえるのか、同窓同期の集まりについての様々な情報やまた同窓会についての疑問・質問をこちらにぜひ寄稿していただきたく、僥越ですが、口火を切らせていただきました。

「待兼六〇談話会」は、六〇年安保の年に入学したメンバーの同期会ですが、年に数回、関西を中心に、メンバーの誰かが提供できる話題でテーマを決めて集まっています。入学定員が六〇名、必須科目の英語を、改修されて今は「大阪大学会館」になっているイ号館の五階で全員一緒に受けた時代でした。全員集合の最初の集まりは入学後三〇年の一九九〇年でしたが、二〇〇〇年以降は、集まりの数が増えて、二〇一〇年には琵琶湖畔の海津大崎の桜を楽して長浜で一泊、二〇一四年には富士山田貫湖畔の国民宿舎に東京勢と関西勢が集まりました。（写真は去年一月五日の談話会の時のものです）



**略歴**  
1940年生れ。追手門学院大学名誉教授。哲学博士。著書『家族の倫理学』（丸善）共訳『ハンナ・アーレントとフェミニズム』（来社）監修『シンポジウム記録「慰安婦問題の真の解決に向けて」』（白澤社）ほか。

## 特集

### 声なき声の芸術祭

#### 声なき声の芸術祭

永田 靖

文学研究科では、主として芸術系の教員有志によって平成二五年度～二七年度の三年間にわたって「劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業（声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声）芸術祭」という事業を実施してまいりました。これは文化庁の「大学を活用する文化芸術推進事業」という補助金の採択を受けて実施したものです。「芸術祭」と銘打っていますが、基本的には社会人に門戸を開き、芸術を通じたアート・マネージメント人材やアート・ファシリテーター人材育成の社会人教育の試みとして計画し、実施しました。毎年平均して三〇名前後の受講生があり、充実した三年間を過ごしました。一年間で六・七つのプログラムを設定し、それぞれ教員が一・二名ずつ担当して実施して行きました。受講生と共に芸術催事を制作していく実践的な芸術教育の試みでした。

例えば、市民参加型演劇の制作を自治体の劇場と協力して実施するもの、海外からのアーティストを一時期招聘し受講生と作品を制作するもの、コンサートとレクチャーを組み合わせた形式を海外音楽家と制作するもの、美術資料をもとに美術館を開催するもの、大阪という場所の個性を生かす芸術催事を制作するものなど、ここでは詳しくは紹介できませんが、それぞれに特徴のある、ユニークな芸術制作を行いました。長いタイトルを持つこの人材育成型の芸術祭は、また大学で行うリサーチとしての芸術祭という側面も持つものです。この長いタイトルは、「声」をモチーフにしていきますが、言ってみればそれぞれ記憶、



**略歴**  
1957年生まれ。文学研究科教授。演劇史・演劇史専攻。マリア現代演劇史の再考をテーマにアジアの演劇研究者との共同研究を行っている。現在、大阪大学総合学術博物館長、21世紀懐徳堂学主、適塾記念センター長、国際演劇学会アジア演劇WG主宰、日本演劇学会会長。

デモクラシー、アイデンティティといった現代芸術が関わる主要な問題領域を想定しています。それぞれのプログラムの中で担当教員や受講生はその扱う材料を扱いながらこれらのテーマについて考えを深め、芸術の催事に反映していく方法を学んで行きました。

もう一つの特徴は、これまた長いタイトルが示すように、近隣の劇場やホール、音楽堂等との協力関係を築きながら行うということです。吹田市、豊中市、尼崎市、能勢町、大阪市など大学として協力関係にある自治体の劇場やホール、ミュージアムなどと連携しつつ進めたことです。このことで、私たちの芸術研究が伝統的な芸術史・芸術学の研究を踏まえた上で、これらの地域の持つ諸問題とアートとを切り結ぶその方法や理念を学ぶまたとない機会となりました。

この芸術祭は三年計画のもので、すでに終了しておりますが、実は本年度からは主催を大阪大学博物館に移し、装いも新たに「記憶の劇場—大学博物館を活用するアート・ファシリテーター人材育成講座」として再スタートしています。取り組みも考え方も少し変わりましたが、大学で行う芸術研究を社会に開き、社会との関係の中で進めていく新しい研究教育のあり方を探求している点では変わりません。

大阪大学では現在、大阪大学中之島センターのある中之島地区の再開発を大阪市と共に計画を始めました。大阪大学の発祥の地であり、かつ美術館や音楽堂など芸術施設が集中する地区において、芸術系の研究教育プロジェクトを展開しようとしております。これは私たちのこれらの新しい研究教育の取り組みをより恒常的に展開できるようにできるものになると期待しています。

## 音楽、言葉、社会をめぐる問い オペラ《新しい時代》再演プロジェクトに参加して。

青嶋 絢

二〇一六年一二月二五日、イルミネーションに彩られた中之島にほど近いザ・フェニックスホールで、浮き足立つ街の様子とは対照的なコンサートが開催された。暗

闇のステージに楽譜が投影された灯篭が浮かび上がり、四人のキーボード奏者がそれを取り囲みミニマルな旋律を奏でる。およそ三〇分続く演奏はドラマティックな展開もなく、単調な繰り返しが続く。後半、楽器の音色が不思議な響きへと変化してゆき、最後にはうねりのある叫び声のような音で終わる。

私が参加した『記憶の劇場』活動四は、作曲家三輪真弘氏によるオペラ作品《新しい時代》(二〇〇〇年)の再演を目指すプロジェクトである。再演(二〇一七年二月予定)の前提として企画されたのが前述のコンサート「声のような音/音のような声」三輪真弘作品集(企画・構成 伊東信宏)である。私たち受講生は、文学研究科伊東信宏教授の指導のもと本企画に関わり、さらにそのドキュメントを「記憶の劇場」展覧会で紹介するという取組みも行った。

オペラ《新しい時代》は一九九〇年代に起きた、神戸連続児童殺傷事件(九七年)やオウム真理教事件を下敷きにして書かれた。この作品に接して、印象に残ったのは、三輪氏が捉える「ことば」の問題についてである。インターネットの普及により、世界中で個人が饒舌に「ことば」情報「を発する時代となった。しかし、言葉がいくらか増えても、その意味を理解することはより困難になったと感じる。三輪氏は、九〇年代の重大事件から、そのような兆候をいち早くよみとっていた。オペラの一曲《言葉の影、またはアレルヤ》について、氏は次のように記している。「……(この作品の試みは)ひとびとのおこないの何もかもが情報化され記号化されていくこの世界で、その巨大な記号化プロセスに対する反抗でもある」。また、作曲において「言葉を音・音楽にあえて置き換える作業をする」という。「ことば」が音楽になったとき、その意味はより伝わりやすくなるのか、言葉に新たな意味が付け加えられるのか、それとも剥奪されるのか、このような問いかけをこの作品から感じずにはいられない。



略歴 一〇一一年(一)マニエリ中心のプロジェクトに参加。大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻(音楽学)に入学。二〇一六年、博士前期課程修了。現在、博士後期課程在籍。

同時代のアクチュアルな問題を、ラディカルな視点で捉える三輪氏の作品は、楽しみや感動を誘う音楽とは異なる次元にある。このような稀有な作曲家の作品に『記憶の劇場』を通して関わったことは、貴重な経験であった。今後、オペラ再演へ向けてさらに準備を進めていきたい。ぜひ、再上演を多くの方に見届けていただきたいと思う。

## 大阪大学が芸術祭を 開催することへの期待

山崎 達哉

「劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業—(声なき声、いたるところにかわりの声、そして私の声)—芸術祭」は三年間開催されました。私は、一・二年目は受講生として、三年目は芸術祭事務局として参加しました。受講する側と運営する側の両方に携わったことは貴重な経験だったと思います。事務局として関わることは、頭でわかっていることを実際に行動する点で受講する側とは全く違いました。何事にもそうだと感じると思いますが、聞いてみることに実際にやってみることは全く違うものでした。特にアート・マネジメント人材を育成するという目的のあったこの芸術祭では、多種多様なアートを実践する現場に、企画や準備の段階から様子を窺えました。それは、文学研究科の芸術系やCSCDの先生方の豊富で多様な知識と経験があったからこそではないかと思えます。

また、事務局として携わることで、たくさんの受講生や外部の先生方、アーティストなど様々な人と出会えたことも非常に大切なことだったと思います。学問であれ、アートであれ、実際に携わり、動かすのは人ですので、たくさんの方に出会え、関わりを持てたことは本当に貴重なことでした。アートと学問、そして人を結びつける活動として、このような活動が続けばと思います。



略歴 大阪大学文学研究科文化表現論専攻(音楽学)に入学。二〇一六年、博士前期課程修了。現在、博士後期課程在籍。

## 同窓生からのメッセージ

文学部と同窓会の共催による就活サポート講座にてお話いただいたお二人にご寄稿いただきました。

## 「役に立つ」学びとは

柳田 佐紀子

私は平成二五年三月に文学部を卒業し、以来奈良県の公立高校で英語の教員として働いて現在四年目になります。学校という場所は日々刺激に満ちており、また生徒の成長に感動する場面も多々あり、忙しいながらも充実した日々を過ごしています。文学部に在籍中は、自分の専門以外の専修の講義も積極的に受けました。物事をいろいろな角度から見つめる姿勢が身についたと思うし、それは現在仕事をする上でも役立っています。もちろん、所属する英米文学・英語学専修で学んだことも大いに自分の力となっています。生徒から英文法などに関して質問を受けたときに、「ああ、大学でこのことについて勉強したなあ」と懐かしく感じることもあり、大学での学びを職業に役立てられていることに幸せを感じる日々です。しかし私は、教員として働く上で役に立つから英語を勉強しようと思っただけではありません。「将来役に立つから」という理由で何かを学ぶという考え方もあっていいし、時にはその必要もあると思います。目的が先行する学び



柳田佐紀子 (やなぎだ さきこ)  
平成21年4月 大阪大学文学部人文学科入学  
平成22年4月 同英米文学・英語学専修へ  
平成25年3月 同卒業  
平成25年4月より奈良県の公立高校の英語科教員  
平成25年4月に奈良県立献傍高等学校に赴任し、現在同校で4年目

にはその先の広がりが無いように思います。ものの価値やあり方が急速に変化する現代にあつては、今役に立つと思っているものが五年後には無用になる、などということも起こり得ます。私が学校で教えている英語も「コミュニケーションのためのツール」と形容されるものが多くなっていますが、私が大学で英語そのものの持つ奥深さや面白さを教えていただいたように、是非生徒たちにも、単にツールとしてのみ英語を捉えるのではなく、英語自体を面白いと感じてもらいたいと思っています。目的は無くても学びたいと思ってもらえることが理想です。それは、学ぶ経験そのものが重要だと考えるからです。経験を通して個々の知識はその人の知恵となります。生徒には、すべての学びには意味があると伝えたいし、一人一人が知識を知恵に変えてどんな状況でも役立てられるよう導いていきたいと考えています。

## 仕事と家庭の両立を目指して

小林 正人

「子どもの迎え当番で、お先に失礼します」

職場に伝えて、保育園と放課後クラブ(学童)へ直行。この生活も七年目。

共働きの我が家の方針は、「妊娠・出産・授乳以外、夫婦の役割は同じ」。子どもの迎えも妻と折半します。迎え時間の捻出がカギです。仕事の忙しさ、発熱等での急な呼び出し、何度もひやりとしました。子どもを近所の方に預けたり、県外の実家に応援を頼んだりを支えられました。

職場で多くが残業する中、ひとり早退して仕事が遅れる申し訳無さ。しかし、夫婦ともお互い様なので心を決めて退社。別の日に挽回を目指します。何年も時間・体力面で厳しかったですが、現在は仕事と育児家事が相互刺激となって、心と身体が動かされるように感じます。

結婚当初、私の家事は炊飯器でご飯を炊けない有り様で、妻にひとつずつ教わりました。何事も夫婦で話し合い、私の育児家事が「お手伝い」でなく「当事者」レベルになるよう取り組んだつもりです。夫婦で育児家事を分担する醍醐味は、ダブルス競技のような助け合いと成長。経験を共有し、お互いに言いたいことを言っても、角が立たない境地にいます(多分)。

育児に向き合うと鉾脈を握り当てたような新鮮な経験が増えます。子ども二人目の誕生時は、育児休業を二ヶ月取得。その後も保育園で保護者会副会長などを経験しました。最近の山場は、長男の小学校入学。保育園から小学校・学童へ環境が一転。夜に帰宅してから宿題のサポート、日替わりの持ち物準備・臨戦態勢が必要と判断し、私は二ヶ月間の短時間勤務を選択し、毎日早退して子どもに寄り添いました。職場のサポートに感謝します。

少子化や経済成長を背景に、女性活躍推進が叫ばれて久しいです。この勢いの加速には、男性の意識と行動が大きなポイントだと思います。周囲に前例が無くても、信じた道を貫くスタイルは、文学部で過ごして確立されたように感じます。これから続く世代のためにも、両立の道を模索して事例を残したいと思っています。



家庭にて

小林正人 (こばやし まさと)  
1998年4月 文学部人文学科入学  
2003年3月 同卒業(東洋史学専修)  
研究テーマ 中国近世社会史(卒論は明清時代の賭博)  
2003年4月 ダイキン工業株式会社入社  
現在 同社 空調営業本部 事業戦略室 管理グループ  
日本国内向け事業の予算編成と実績管理を担当

# ◆「教育ゆめ基金」のご報告◆

いつでも、お心のままにご寄附いただければ幸いです

文学部創立60周年(平成20年)の折に創設しました「教育ゆめ基金」は、文学部・文学研究科の教育活動を支援していただくための基金です。この基金は、人文学教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、優秀な学生への奨学金等、もっぱら優秀な人材を育成するための教育助成を目的としています。平成25年秋に大阪大学「未来基金」と窓口統合したことにより、いっそう多くの同窓生ならびに教職員の皆様より、平成28年度総計200万円ほどのご寄附をいただきました。ご厚情に心よりお礼申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。(文学研究科長 金水敏)

## 2016年2月～2016年12月「教育ゆめ基金」寄附者リスト(敬称略・五十音順)

荒牧 典俊	大森 紀子	金井 誠	徳田 敏郎	野上 由夫	藤江 啓子	矢田 勉	好川 祥一
飯田 朋子	大和田元康	川越いつえ	豊田 眞司	早川 雅一	藤岡 穰	山上義太郎	吉田 富子
井上 専	岡田 純子	後藤 昭夫	中島 巖	平尾 和之	帆足 星海	山田二三夫	渡辺 義嗣
梅田健太郎	荻山 優二	齋藤 誠	中瀬富美子	深水香津子	保知 範繁	山本 俊輔	
江川 圭二	越智 真也	里見 軍之	中村 啓	福田 公子	松永 千広	有限会社	
大澤 友彦	片岡 孝夫	武田 裕紀	難波香能子	福田 治子	間宮 啓壬	後藤書店	

## ◆「教育ゆめ基金」の支出(2016年2月-12月)

- ・海外留学支援制度奨学金 250,000円(1名分)・大学院生海外調査等助成 158,900円(10名分)
- ・エラスムス・ムンドゥス・プログラム 288,000円(2名分)

※平成28年度内に、海外留学支援制度奨学金250,000円と、大学院生海外調査等助成141,100円を支出予定。  
平成28年12月末現在の残額: 8,963,344円

「教育ゆめ基金」による研究助成を受けたお二人にご寄稿いただきました。

### 神々の「ルネサンス」を辿る旅

関 大輔

平成28年8月27日から9月10日まで、教育ゆめ基金調査研究助成費をいただき、イタリアでの調査旅行を実施しました。ヴェネツィアからフィレンツェを経てローマまで、5州9都市を巡った目的は、中世からルネサンス期にかけてのイタリアにおける占星術に基づいた芸術作品を調査することでした。イタリアに始まったルネサンスとは、栄華の極みに達した古代ギリシア・ローマ文化の「再生」を意味する言葉であることは、広く知られています。ルネサンスを代表する画家の一人であるボッティチェリの《ヴィーナスの誕生》からもわかるように、15世紀に古代の神々は華々しく復活したのです。これは裏を返せばヴィーナスら異教の神々は一度「死んだ」、ということになります。しかし、近年の研究では、神々は様々なかたちでキリスト教の中世を生き延びていたと主張されています。そのかたちの一つが占星術でした。神々は惑星や星座になることで天上の世界で生き続けたのです。その生き残りの物語は文学や美術、建築などの芸術作品となって今に伝わっています。とはいえ、中世とルネサンス期の占星術的芸術作品とではその性格は大きく異なります。しかもそれは単に技法だけに依るものではなく、占星術を取り巻く思想的・社会的背景の変化に負うところが大きいのです。占星術に着目することでルネサンスという現象を捉え直すことができるのではないかと。この考えのもと、現在研究を進めています。この旅では、中世からルネサンス期にかけて占星術的芸術が変化していく様子を追いながら、まとまった分量の作品を観察し、カタログ化を進めることができました。またルネサンス期の雰囲気や今に残す都市を実際に歩くことも貴重な体験となりました。今回の調査で得た成果と体験をもとに、さらに邁進していく所存です。



関大輔(せき たいすけ)  
1992年7月山口県生まれ。2016年3月大阪大学文学部卒。現在、同大学院文学研究科博士前期課程文化表現論専攻(美術史学専門分野)在学。

### 東北合同研究会への参加

林 日佳理

2016年8月7日に東北大学にて行われた東北大学・東北学院大学・大阪大学合同研究発表会に参加するための旅費の一部として、教育ゆめ基金の助成を受けました。この研究発表会で私は、現代アメリカ作家トニ・モリスンの小説作品を取り上げ、『We Are Not “Other”』—Toni MorrisonのParadiseにおける「色づける力」としての書くこと』というタイトルで研究発表を行いました。

この研究会は、年に一度、大阪大学・東北学院大学・東北学院大学の英文研究室に属する教員と大学院生が一堂に会し、それぞれの研究成果を発表することで互いの研究を深めることを目的としています。とくに普段なかなかお会いできない他大学の先生方、院生の方々に自分の研究を発表しコメントをいただくことは、論文を書くためにも、今後の研究の展望を広げるためにも、とても大切な機会です。今回の私の発表においても、研究テーマである「書くこと」と「他者」というトピックに関して、これまで思いつかなかったような視点からの鋭い意見やコメントをいただくことができ、自分の議論の不足している点が明らかになるとともに、今後論文として書き上げる際にどう補強すればよいかを考える手助けとなりました。また、ほかの大学院生の研究発表を聴くことで、アメリカ/イギリスや現代/近代といった専門の枠を超えて、「書くこと」に対するさまざまな問題意識やアプローチの方法があることを実感でき、とても有意義な経験となりました。

大学院生にとっては、自分の研究成果世に問うきっかけの機会でありながら、遠方の研究会へ参加するためには旅費などがネックになることがあるので、今回教育ゆめ基金からの助成を受けられたのは大変ありがたいことです。今後も、研究発表の機会を積極的に活用しながら、研究を進めていく所存です。



林日佳理(はやし ひかり)  
文化表現論専攻 英米文学専門分野 博士後期課程2年  
2008年4月 大阪大学文学部入学  
2012年3月 同 卒業  
2012年4月 大阪大学大学院博士前期課程入学  
2015年3月 同 修了  
2015年4月 大阪大学大学院博士後期課程入学、現在に至る

## 退職される先生方からのメッセージ

### ◆特になし

出原 隆俊

こんなタイトルをつけると、我ながらふざけ過ぎかなとも思うが、実感を言えばこういうことになる。大学への帰属意識が薄いという訳でもないのだが。国立大学法人化を含め、大学の変容には今さらながら驚くことばかりで、学生時代に産学協同に対する批判の声を聴くことも少なくなかったが、今は軍事につながる研究への誘いに対する危機感へと変貌している。先日配られていたピラに「授業料が月額千円だったが、時代があることを知っていますか」との文言があったが、私など最後の生き証人といってもよい。「わが亡き後に洪水よ来たれ」どころか、大学の危機への接近は、漱石の『夢十夜』の第一夜をもじって記せば、「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気がついた」ような「始めて」どころでないことは承知している。ただ個としてはタイトルの通りだ。

いつどなたから聞いたのか記憶にないが、阪大坂を上るのがつらくなる頃には定年が近づいているので、別名定年坂というところがあった。定年が二年延びた今、この坂を往復するのがつらくなってきたわけではないが、二十八年前の夏に、到着した研究室で汗の処置に困って以来、とうとうこの面倒は変わることはなかった。最後の夏にしみじみとそれをかみしめたのではなく、普通のハンカチと汗ふき用のタオルの併用がわずらわしいままに終わったと今思い返すのである。その意味ではホッとしたともいえる。また、「教育」という側面からは基本的に解放されることもそういえるかもしれないが、「研究」という点では先人の方々と同様に、枯れる境地とは遠い。どうにか設けた書庫の前でどうしたものかと思いつけるこの頃である。



略歴  
京都大学大学院博士後期課程中途退学。県立広島県立女子大学、京都教育大学をへて、1989年に大阪大学。著書に『異説 日本近代文学』（大阪大学出版会、2010年）、岩波文庫『二百十日野分』（岩波書店、2016）、共著に『定本 漱石全集』第三巻（岩波書店、2017）など。

### ◆無題

上野 修

竹中亨教授（西洋史学）、三宅祥雄准教授（アート・メディア論）のお二人も退職されます。

あつというまの十三年でした。カタツムリは歩みがのろいので、きつこの枝からあの枝に行くまでに日が暮れてしまふ。そんな感じでしょうか。その間にも大きな変化がありました。外大との統合、阪大坂の整備、文法経本館の耐震工事とそれに伴う研究室の移転。坂の下の住んでいた宿舎の取り壊し。そしてさまざまな改革。ぼうつとした隙間がだんだん見つけにくくなってきているというのはそうかもしれませんけれども変わらないものもあります。

私は近世の西洋哲学が専門なのですが、哲学のそれも古典を相手にしているときはまったく違う時間の中にいる気がします。若い人たちが相手に気が遠くなるほどスローな原典講読などをやっている、外から見れば何をやってんだかと思われるでしょうが、たしかにその間は独特の時間を生きている。だれのものでもない時間、測ることのできない時間とも言いましょうか。講義でもそういう時間が教室に訪れることが時折あります。こんな贅沢なものを確保できるのは大学の、それも文学部というものの存在のおかげだと心底思います。この間、東京をはじめ、文字通り北は北海道南は九州までいくつもの大学で集中講義をする機会を与えられましたが、どこでも同じことを思いました。

私は自分で面白いと思えないことは何ひとつできないというわがままな研究能力を持っているのですが、それを思う存分発揮できる環境に守られてきたことにあらためて感謝します。同僚のスタッフはもちろん、耳を傾けてくれた多くの学生たちに。指導などいいますが、本当は彼らや彼女たちの無謀とも見える「やりたいこと」を何とかする中で、私のほうが育ててもらった。そう言う方が正しい気がします。



略歴  
1951年生まれ。大阪大学文学研究科博士後期課程単位修得退学。大阪大学文学部助教授、山崎大学教養部助教授を経て2004年より大阪大学文学研究科教授。著書に『スピノザの世界』、『デカルト、ホッブズ、スピノザ—哲学者の十七世紀』、『哲学者たちのワンダーランド』、『スピノザ「神学政治論」を読む』など。

### ◆感謝と少しの安堵と

内田 次信

阪大で十一年間お世話になり、それ以前の他の大学での勤務を加えると、三十数年教員として、「先生」と呼ばれてきたが、この年月の総括的感想として、教えることほど難しいことはないと感じる。研究ももちろんいろいろな点で苦勞を強いるが、それがもし成功しなくても、共同研究でなければ、困るのは自分だけである。しかし教育は、十人単位あるいはそれ以上の数の人を相手にし、しかも一人一人が知識や関心や性格を異にするので、ある学生にはいちおううまくいった教え方や接し方でも、他の場合にも適切であるとは限らない。もともとこちらも、教育者的な適性があるとは自己評価的にとても思えない。つねに迷い、けつきよく満足できる道は見いだせなかった。

しかし専門の研究のほうは楽しかった。年と経験を経ると見えてくるものが増えるので、これからは、いわば新たな知の光景を西洋古典の中に見つける喜びに没頭できるだろうと、けっこう希望を膨らませている。

そのように、つたない授業を寛容に受け入れてくれた優秀で温良な学生諸君には感謝するとともに、この義務から解放されることには一種の安堵も覚えている。「希望」という点とはよくよく思わぬ。以上が、退職に際しての正直な気持ちである。



略歴  
1952年、愛知県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。京都光華女子大学、大阪学院大学を経て、2006年に阪大赴任、文芸学専修。専門分野は西洋古典文学、神話学など。著書『ヘラクレスは繰り返される』、訳書『ピンドロス祝勝歌集/断片選』『アリストパネス 蛙』など。

## ◆二十歳前の旅立ち

藤田 治彦

一九九八年四月から一九九九年間お世話になり、ありがとうございます。あとも一年で二〇年の阪大勤務二十歳前の定年でございました。

私のこども時代は高度経済成長期で、地方に生まれ育ったこともあり、理系に進みました。国語の成績は県内最上位ぐらいでしたが文系進学を勧めた人はなく、絵も描きましたがそれ以上教える人もなく、高校時代は数学と物理の勉強に明け暮れました。親の期待も自分の希望も叶うように選んだのが造形教育の伝統のある理工系大学でしたが、大学の数学の授業を受けてみると、その才能なしと自覚しました。大学院時代には大阪の建築専門学校から造形力学の非常勤講師を依頼され数年間教えたのですが、受講生にすまないと感じながらの講義の日々でした。アメリカ留学から帰る京都で一五年ほど教えると、当時の大阪大学文学部からお誘いがあり、史論研究と教育に集中できそうだと考え、母校に申し訳ないと感じながらも、阪大の美学研究室に移ったのです。

元来文系あるいは芸術系タイプの人間が、四〇代後半になってようやくその道に入ったのです。水を得た魚といふほど泳げたわけではありませんが、その後一九九九年間、建築から工芸そしてデザインの美学まで、調査、研究、執筆に明け暮れ、本学にも前任校にも貢献できたならいいのだがと思います。

研究はまさに文系の芸術家モリス等が中心で、理系の知識など使わなかったのですが、東京国立近代美術館勤務の阪大美学修了生からの依頼で、最近建築家プロイヤーについて「構造と構成」という副題で展覧会図録の巻頭論文を書き、初めて造形力学の知識を使いました。そして、私はまだ何かを始めたばかりなのだと思っただけです。同僚の皆様とは異なり、まだ成年に達していない「二十歳前の旅立ち」です。

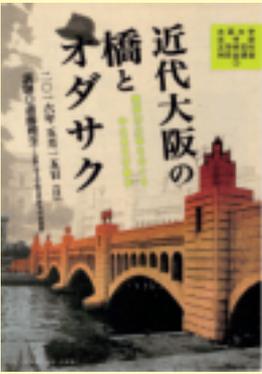


略歴  
1951年、福島県生まれ。京都工芸繊維大学大学院修士課程、大阪市立大学大学院博士課程修了。京都工芸繊維大学工学部を経て、1998年に大阪大学文学部赴任、美学専攻教授。専門分野は美学・芸術学。著書『ナショナル・トラストの国』『天体の画像学』、編著書『芸術と福祉』、監修書に『ウィリアム・モリス 原風景でたどるデザインの軌跡』など。

## 第7回大阪大学文学部・文学研究科 同窓会講座についてのご報告

平成二八年五月一五日（日）、「近代大阪の橋とオダサク 織田作之助をめぐる中之島文学散歩」が開催されました。

昭和文学研究者である斎藤理生先生（本学准教授）のご案内で、水晶橋から玉江橋まで、中之島にかかる橋の見所を学びながら歩いた後、中之島センターで織田の小説について講義を受けました。今後も同窓会ならではの講座を企画したいと思っております。どうかご要望をお寄せ下さい。



## 事務局使い

### ●お知らせ

◇「文学部・文学研究科 卒業生・修了生名簿」（二〇一七年版）について  
二〇一七年三月刊行の『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』ご購入を随時承っております。頒価（五千四百円・送料込）でお送りいたします。ただし名簿のご購入は同窓会会員の方に限定しておりますので、ご入会がお済みでない同窓生の方には入会手続きをお願いしております。あらかじめご了承下さい。なお、新規に同窓会終身会費（一万円）をお支払いただいた方のうち、希望される方に一冊呈呈しております。振込用紙通信欄に名簿希望の旨をお書き添え下さい。

◇ご購入希望の場合は以下の郵便振替口座に所定の金額をお振込み下さい。ご入金確認後、発送させていただきます。ご購入に際しご質問等ございましたら同窓会事務局まで遠慮なくお問い合わせ下さい。

### ◇同窓会へのご寄付について

同窓会では、寄付金（一口二千元）を受け付けております。昨年度・今年度と、たくさんの方に支援を賜りました。五頁にご寄付をいただいた皆様の御芳名を記載しております。誠にありがとうございました。引き続きご支援をお願い申し上げます。

### 【名簿購入代金・終身会費のお支払い、ご寄付の受付】

□座番号 009401179043  
加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

\*お手数ですが、通信欄に①卒業・修了年、②専攻専修名をご記入下さい。

### ●お願い

#### ◆住所変更について

住所変更・勤務先変更等ございましたら、必ず同窓会事務局までご一報下さい。名簿への住所、電話番号等の記載拒否を希望される場合は、その旨あわせてお知らせ下さい。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

### ●大阪大学文学部・文学研究科同窓会

- ◆会長 志水紀代子（S四〇卒）
- ◆副会長 柏木隆雄（S四四卒）、大西愛（S四〇卒）
- ◆事務局メンバー
- ◆事務局長 村田路人（S五二卒）
- ◆総務 岡田禎之（S六二卒）、高木千恵（H一〇卒）
- ◆会計 西田有利子
- ◆企画 市大樹（H七卒）、中尾薫（H一五修）
- ◆広報 舟場保之（S六一卒）、斎藤理生（H二〇卒）
- ◆事務局補佐 宮川真弥（H二二修）
- ◆事務局補佐（Web担当） 鈴木寛和（H二六卒）

- 住所 〒500-0150 豊中市待兼山町一番五号
- ホームページアドレス <http://www.letosaka-u.ac.jp/dousou/>
- 事務局メールアドレス [dousoukai@letosaka-u.ac.jp](mailto:dousoukai@letosaka-u.ac.jp)

## 同窓会へのご寄付のお礼

2014年のニューズレター第13号より、同窓会活動のこれからの更なる活動のため、みなさまに一口二千円で呼びかけを始めさせていただきましたところ、下記のみなさまから早速に文学部・文学研究科同窓会にご寄付を頂きまして、誠にありがとうございました。

独立法人化の中で、同窓会活動の重要性が見直されておりますが、学部の独自性を生かして今後どのような支援活動をしていけるのか、多くの大学の学部・研究科で試行錯誤の段階にあります。当文学部・文学研究科は、他学部・研究科に比べても引けを取らない多くの人材を輩出しておりますが、残念ながら財政的な基盤が弱く、まだまだ十分な支援が出来ておりません。これからさらに多くのみなさんにこの実情をご理解いただき、お知恵をお借りして、独自の支援活動をしていく体制を整えていきたいと思っております。

本同窓会といたしましては、一口二千円で今後とも多くの卒業生のみなさまにこの寄付金のことを知っていただき、賛同の輪を広げていきたいと思っております。どうぞ今後ともご支援を頂きたく、よろしく願い申し上げます。

同窓会会長 志水紀代子

### 同窓会寄付者 御芳名

(2016年2月～2016年12月入金分)  
五十音順・敬称略

〈2015年度〉	〈2016年度〉
野口 真戒	浅井(山下) 郁
松本 紘葉	岩本(小薮) 舞
安井 亮太	谷 雅史



アーティスト・イン・レジデンス  
「クリッシー・ティラー ワークショップ&プレゼン  
テーション」の「おみおくり」イベント  
(大阪大学旧石橋教職員宿舎にて)

## 第8回大阪大学文学部・文学 研究科同窓会講座のご案内

2017年5月14日(日) 13時30分～

「阪急文化に親しむ

—創業者・小林一三の世界—

●豊中キャンパスへの足として親しみのある阪急電車の創業者小林一三の事績をたどります。逸翁美術館にて「第一幕 THE 書～数寄者が集めた古筆、お見せします～」を見学後、小林一三記念館を学芸員の解説付きで見学。その後、本学名誉教授、現在阪急文化財団理事・館長でいらっしゃる伊井春樹先生のご講演をうかがいます。

※集合場所：逸翁美術館（阪急池田駅より徒歩10分。13時より受け付け開始）

※講師：伊井春樹先生（本学名誉教授、阪急文化財団理事・館長）

※展示解説：正木喜勝氏（演劇学平成12年度卒、阪急文化財団学芸員）

※参加費：1,000円（入館料込）

### ●お申し込み方法

氏名・卒業（修了）年次・専攻を明記の上、メール又はハガキで下記連絡先までお申し込みください。

※応募締切は、2017年4月30日（日）です。

※応募多数の場合は先着順とさせていただきます（定員30名）。

メール：dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

住所：〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5

大阪大学文学部・文学研究科同窓会 宛